# 解説

1972（昭和 47）年，東京大学出版会より出版された『分裂病の精神病理 1』を皮切りに，〈分裂病の精神病理〉のシリーズがはじまった．安永 浩，木村 敏，中井久夫，笠原 嘉，そして宮本忠雄といった名だたる精神病理学者が旅館にて合宿し，各自の発表をもとに互いに真剣な議論を行い，その成果がこの研究書に結実したのである．16 巻（1987）まで続いたこのシリーズは，精神医学の分野だけでなく，哲学をはじめとした人文科学の分野にも大きな影響を与えた．

本論文「言語と精神分裂病」は，『分裂病の精神病理 1』（土居健郎 編）と『分裂病の精神病理 2』（宮本忠雄 編，1973）に掲載された「言語と妄想──精神分裂病の言語論的理解 1」，「言語と妄想──精神分裂病の言語論的理解 2」を主要な源泉としている．雑誌『言語』に掲載された「言語危機の病理」（1972）がもう一つの源泉となっていることも付け加えておかねばならない．1970 年代は精神病理学にとって「豊穣な時期」であり，この論考からもその熱気が伝わってくる．

宮本忠雄は当初，博士論文「実体的意識性について──精神分裂病における他者の現象学」（1959）によく示されるように，患者と他者，ないし世界との関係性に注意をはらう現象学的アプローチによって，統合失調症の病態解明を試みた．次いで，フランスを中心に華々しい発展をみた構造主義，また構造言語論に触発される形で，患者における言語の様態に注意をはらい統合失調症の病態解明を試みた．「精神医学は言語と切り離しては考えられない」という言葉からはじまる本論文はその代表的な成果である．

それまで親しんでいた世界が日常的な意味を失い，名付けようがない“もの”があらわになり，患者は言葉を失う事態を「“もの”体験」，また「言語危機」と呼び，この強度がきわめて高い出来事に引き続き，他者の声が聞こえるといった幻聴，また「会社の上司が妻を妾にしている」といった（嫉妬）妄想が出現してくる現象を「言語再生」としてとらえる．その場合の言語再生に，幻覚型と妄想型の 2 つの類型があるという論点も提出される．

統合失調症の言語論的理解は明快で，精神病理学に新しい息吹きを与えた．そこで強調された「精神分裂病はすぐれて言語的な病態である」という問題認識は，認知科学のパラダイムが力をもっている今日，再評価に値する．こうした論考は，宮本忠雄 42 歳，43 歳の作で，ちょうど自治医科大学精神医学教授（1973）に就任する頃の時期にあたる．ムンクの太陽壁画がムンクの人生史にとってもつ特異な意味作用を明らかにしながら太陽体験を論じた「太陽と分裂病」の論考は，『分裂病の精神病理 3』（木村 敏 編，1974）に掲載された．宮本先生はしばしば Jung の言葉をふまえながら，40 歳代を南天に達し煌々と輝く太陽になぞらえていた．確かにこのことは宮本先生にあてはまり，40 歳代にきわめて質の高い論考が発表されたように思う．

自治医科大学精神医学教室では，毎週水曜日午後，病棟にて原則すべての教室員が参加

する症例検討会が開かれた．そこでは，入院してまもない患者さん，また退院予定の患者さんに検討会の部屋に入っていただき，科長である宮本先生がそれぞれ 30 分あまりかけて綿密な面接を行った．患者さんが入室してからはじまる医師–患者の出会いの時間において，さながら筋書きのないドラマが実演されるのを，目の前でみる思いであった．今でも，面接自体が見事な精神療法の効果を発揮したいくつかの名場面を思い起こす．続いて患者さんの精神病理について含蓄に富むコメントをした．その際，「“もの”体験」，「言語危機」，「言語再生」といった言葉が使用されることもあった．あらたに創出された言葉を耳にした教室員は，興味をひかれ，師の論考をすぐさま読んだものである．一回の面接が治療効果をもつことを目の当たりにすることもあり，すぐれた精神療法家である先生から多くのものを学ばせていただいた．「宮本精神病理学」はいつも，実際の治療の問題に与することを陰に陽に目指していたように思う．「言語危機」と対になる「言語再生」はまさに治療的側面にかかわる言葉といえる．後年，先生は「精神療法と自己治癒──とくに内因性精神病の場合」（臨床精神医学 1985；14：1011–1017）などの論考にて自己治癒の問題を正面から問題にする視点を打ち出した．“もの”体験，言語危機からの言語再生という考え方にすでに，この観点をみて取ることができるといえるだろう．

（加藤　敏）